

猪 19 巨猪の話 = = = 猪・鹿・狸より

巨猪を獲た話は、どんな狩人でも定まって一つぐらいはもっていた。それが申し合わせたように四〇貫と言うたのも偶然であった。猪としては、四〇貫どころがあるいは限度であったらしい。しかもその程度の猪は珍しいとは言い条、まだまだいたらしいのである。某の狩人がそう言うていた。ある時出沢(すざわ)村の入りのアテ(陰山)で、仲間と二人で発見した肢跡は、かつて見ぬほどの巨大さで、こんな肢をした猪だったら、牛ほどもあろうと想像して、山の神を祀るやら、応援を頼みに行くやら、えらい騒ぎをやって、やがて撃ち止めて見たら、なるほど巨きいには違いないが、四〇貫そこそこだったと言う。ただ肢の蹄が骸に似合わず巨きかったそうである。そんな猪を万一取り遁したら、それこそ七〇貫や八〇貫の猪にたちまち成ったかも知れぬ。捕った猪の方は、一々昇いだ代物だけに、馬鹿馬鹿しい誇張はなかったのである。

鳳来寺山行者越の、丸山某〔豊作〕は五十幾年の狩人生活の間に、ただ一人で撃ちとった猪の数は、七〇〇頭に余るほどの剛の者だったが、四〇貫を越すほどの獲物は、ただの一つしかなかったと言う。しかしながらその一つが、六〇貫に余る巨大なものだったと言うから、まず未聞のこととして恥ずかしくなかった。もう四〇年も前のことで、細かい点は深い記憶もなかった。ただ何としても珍しかったこと、その猪を撃つ前日に、偶然遠くから望み見た印象だけは、今もありあり目に残ると言うていた。

ちょうど秋の末で、北設楽郡駒立の奥の山へ、遊牝(うかれ)猪を撃ちに入りこんだ時だったそうである。山の峯に立って、遙かに前方の谷を望むと、枯草が何処までも続いた中を、およそ四、五〇頭もあるかと思われる猪の大群が、ひときわ勝れた巨猪を先頭にして、一斉に谷に向かって走りつつあった。そのうち先頭の猪が如何にも巨きくて、他の猪が子猪のように見えたそうである。あまりの見事さについて見惚れてしまったほどで、その時ほどの壮観は、後にも前にも見なかったと言う。翌日あっけなく撃ち止めた猪が実は前日群れの先頭にあったものらしく、比類ない巨猪だった。一人で黒川の村まで背負い出して、美濃の岩村の猪買いに売ったが、臓腑抜き五五貫あったから六〇幾貫は間違いなかったと言う。丸山某は異常な臂力の持主で、一〇〇貫の荷を負うて如何なる険阻にも耐えたと言う。

六十幾貫は類ない巨猪のはずであったが、同じ男の語るところでは、同じ北設楽郡古戸(ふっと)の山では、七五貫あるいは九〇貫の猪を撃ったことを、話には聞いたそうである。しかし実際見たわけではないから、真偽のほどは判らないと言うていた。

はたしてそんな巨猪がいたかどうか何とも判らぬが、北設楽郡内でも、段戸

山（だんどざん）や彦坊の山の杉の植林地には、丈余に伸びた萱の葉影に、多数の猪が群れ狂っているのを、山仕事に入り込んだ杣や木挽きがよく見ると言うた。御料林のことで、あそこばかりは猪も放し飼いだなどと、語るのを聞いたことがあった。果たしてそうであるか、聞こう聞こうと思いながら、ついにその折りもない。

巨猪ではないが、猪の一属に、シラミ猪と言うのがあって、体に一面虱のたかったものがあるという。肉は臭くて食べられぬと言うた。果たしてそんな猪がいるか、これもまだ確かめる機会がない。